発達理論の学び舎

Back Number: Vol 310

Website:「発達理論の学び舎」

No.1305 大地の声_A Voice of the Ground

© YOHEI KATO 2020

目次

6181. 秋の一時帰国のスケジュールの再検討/今朝方の夢

6182. シュタイナーの統合思想より

6183. フライトの予約変更を無事に終えて

6184. 祈りを根幹とした観想的な実践生活と創造の起点

6185. ライフステージの変化と引っ越しについて

6186. 他者や社会の幸福と自分の幸福

6187. 道ゆく人の口笛より/ベルナルド･リーベフートについて

6188. 今朝方の夢

6189. 引っ越しによる再出発/6Gの時代に

6190. ゲオルク･ジンメルの貨幣論/ゆとりや余白の大切さ

6191. 京都の訪問/本日の読書の予定

6192. 今朝方の夢

6193. 芸術に関する難解な問いと出会って/可能世界と芸術/遊びとゆとり

6194. ヴァーチャル美術館/内的対話と内的感覚の変容

6195. 今朝方の夢

6196. 幸福な1日/連続する夢の世界

6197. ティモシー･モートンの「対象志向性存在論」の探究

6198. 生態経済学/時空間を生み出す事物

6199. アートセラピー/フッサールの興味深い発見事項/今朝方の夢

6200. ハーグに住む友人と過ごした土曜日

6181. 秋の一時帰国のスケジュールの再検討/今朝方の夢

時刻は午前6時半を迎えた。この時間帯はもうすっかり明るい。今日は晴れのようだが、今空にはうっすらとした雲が川のようにゆっくりと動いている。この雰囲気だと何とか朝日が差し込んでくるぐらいだろうか。

昨夜も少しばかり考えていたが、日本の一時帰国に際して少しスケジュールが変わり、最初に実家に滞在することになった。日本に到着して最初の週にはオンラインでのミーティングもあり、そのミーティングはどこか落ち着いたホテルの自室で行いたいと思っていたので、今回は実家に長く滞在するのではなく、早めにどこかの県に移動しようと思う。

当初の予定では、福井県と石川県の滞在を考えていたが、それに加えて今回は京都にも滞在しようかと考えている。秋の時期の京都は素晴らしいであろうし、明恵上人ゆかりの地と、臼井甕男が霊力を開眼させた鞍馬山にも足を運んでみたいと思っていたのだ。例えば、鞍馬山のどこか旅館に宿泊し、そこから市内の美術館や博物館巡りをしてもいいかもしれない。それか明恵上人ゆかりの高山寺辺りの旅館に宿泊するというのも手である。

京都に少し宿泊してから東京に向かうという計画が良さそうだ。東京で1つイベントを開催し、大阪に移動して大阪で仕事を行う。その後、石川県、福井県に足を運んでオランダに戻るというスケジュールにしようかと思う。スケジュールについては、一時帰国の日がさらに近づいた時に確定させよう。

それでは今朝方の夢について振り返り、本日の取り組みを始めていきたい。夢の中で私は、地元の海岸を歩いていた。しばらく砂浜を歩いていると、以前にはなかったような建物があり、そこに入ってみた。すると、現在協働している知人の方がそこにいて、今からその建物の一室で、取締役会が行われるとのことだった。私も会に参加してはどうかと持ちかけていただいたので、私も会に参加することにした。

取締役会の参加者の顔ぶれを見ると、随分と歳を取った人が多かったが、高齢者と呼ぶのもまた違和感のあるような微妙な世代が集まっていた。会がいざ始まってみると、予想通りにそこでなされる議論が退屈であり、そこにいることが時間の無駄のように思えてきた。

するとどういうわけか、私はガラスを口に入れてそれを噛み砕き始めた。その場にいた人たちは私の行動に驚いているようだったが、そこから何かスイッチが変わったのか、その場の議論が少し面白くなってきた。笑いもあり、活発な意見交換がなされるようになったのである。それを見て私は、自分の口にあったガラスの破片を丁寧に手で取り除いでいった。思わず飲み込んでしまったら大変なことになるかもしれないと思っていたので、全てを念入りに取り出していった。

気がつくと、私はまた砂浜にいた。そこから私は再び砂浜を散歩し始めた。すると、大学時代のサークルの先輩に似たような人が私の近くにいて、その男性と少し話をした。すると今度は、先ほどの協働者の方の友人と名乗る比較的若い小柄な女性がその場に現れて、私たちに挨拶をしてきた。私は、隣にいた男性の立ち居振る舞いと言葉の美しさを褒めたところ、その女性もそれに共感しているようだった。フローニンゲン：2020/9/1（火）07:14

6182. シュタイナーの統合思想より

時刻は午後3時を迎えた。これまでのところ、今日は読書がとても捗っていて、つい今し方本日4冊目の書籍の初読を終えた。今日は朝から順番に、“The Foundations of Aesthetics”、″Commodities and Capabilities”、“Modern Monetary Theory and its Critics”の3冊を読み進め、先ほど“Social Threefolding: Rebalancing Culture, Politics & Economics”を読み終えた。

ここのところは毎日読書を続けていて、今日はとりわけ集中力が高かったこともあり、気がつけば4冊の初読を終えていた。とりわけシュタイナーの経済･社会思想からは得るものが多かった。中でも印象に残っているのは、シュタイナーの経済･社会思想の根幹に、発達の原理である「差異化があっての統合」という考え方が横たわっていることである。端的には、経済、政治、文化をごた混ぜにするのではなく、まずはそれらの差異を的確に把握し、それらを独立させた形で捉えていく必要があるという考え方である。

とりわけ現代のように経済の優位性が極めて強い時代において、それらの差異を認識しなければ、全て経済の力に屈してしまう。今の政治運営や文化の有り様を眺めてみれば、もうそれは歴然かと思う。端的に言えば、それら3つの領域の差異の認識の欠落と、それが引き起こす病が見える。そう

した病を治癒していく初手として、改めてそれらの差異化から始めてみることが求められているのではないか。

そのようなことを考えながら、また別のシュタイナーの指摘を思い出した。シュタイナーが提唱する霊性の科学においては、兎にも角にも現実を直視し、それと向き合うことの大切さが強調されている。中でも、このリアリティーは対立や矛盾に満ちていて、それらを把握することがなければ、私たちはリアリティーの認識を誤ると述べていたことが印象に残っている。ここでは、シュタイナーの霊性思想が時代と向き合うという非常に地に足の着いたものであるという印象を受けた。そして単に地に足の着いたものであるだけではなく、シュタイナーはやはり実践する思想家であり、霊性と実践の関係についても明確に述べている。シュタイナーは、真の霊的洞察において、社会的思考と倫理的思考は1つになり、それをもとに行動が生み出される、と指摘している。それには強く同意する。

その人が本当に深い霊的洞察を獲得しているのかは、社会性･倫理性のある思考をしているかどうかだけではなく、その人の最終的な行為を見ていく必要がある。つまりは、霊的洞察がきちんと体現されているのかを見ていくのである。まさにこれは、ウィルバーの言葉で言えば、“spirit in action”という言葉になるだろうか。あるいは“action through spirit”が実現されているかを見ていく必要がある。

シュタイナーの中に見る統合思想について改めて考えていると、ふと、様々なものが内側に統合されていき、その結果として生まれる誠実さ、そして誠実さに立脚した統合に向けたアクションについて思いを巡らせている自分がいた。integrateからintegrityへ。そして、integrityからintegrateへ。そのような相互作用がそこに見出せる。フローニンゲン：2020/9/1（火）15:28

6183. フライトの予約変更を無事に終えて

時刻は午後3時半を迎えた。今日は昼過ぎに嬉しいことがあった。端的には、無事にフライトの予約変更ができたのである。

いつものようにバナナと4種類の麦のフレークに豆乳をかけた軽めの昼食を摂り、日記を編集し終えた後、JALのオランダのコールセンターに電話をした。いつもであれば数分ほど待つのだが、今日は電話をかけた瞬間にオペレーターの方に繋がった。挨拶をして、すぐに用件を伝えたところ、

予約変更も速やかに行われた。少し順を追って説明すると、オペレーター経由で予約変更をすると5000円ほどの費用が発生し、ウェブサイトを通じて自分で予約変更をすれば無料であることを以前オペレーターの方から聞いていたので、昨日自分でウェブサイトを通じて予約変更をしようとした。

すると、エラーメッセージが表示され、うまく予約変更ができなかった。まずはその点について事情をオペレーターの方に伝えたところ、今回はブリティッシュ·エアウェイズが現在運休となっているため、エラーメッセージが表示されたとのことだった。また現在はコロナの影響下にあるので、オペレーター経由でも予約の変更は無料であると聞いて、その配慮をとても有り難く思った。最悪日本に帰る日を前倒しにしてもいいかと思っていたが、今朝方フィンエアーの座席状況を調べたところ、空席があるようだったので、行きの便はブリティッシュ·エアウェイズからフィンエアーに変えてもらった。

確か、今回の航空チケットを予約した今年の3月末の時点では、出発日のフィンエアーのビジネスクラスはもう満席であり、座席が取れなかったと記憶している。ところが今はこうしたご時世であるから、ビジネスクラスのキャンセルが続出したのだろう。当初の出発日と同じ日付、しかもアムステルダムを出発する時間はブリティッシュ·エアウェイズのフライトの出発時間とほとんど変わらない正午前なので、とても有り難く思った。ヘルシンキでの乗り換え時間も十分にあり、ラウンジのサウナで寛ぐことができればと思う。ブリティッシュ·エアウェイズからフィンエアーに変更したことに伴い、関空に到着する時間が幾分早まった。出発した翌日の朝9時前に日本に到着することになった。

先日父と相談し、旅のスケジュールを変更することになったので、まずは実家にすぐに帰り──今年は免許の更新の年なのだ──、その週末からオンラインでの仕事があるので、それに集中するために、実家の滞在はとても短くなり、すぐに京都に移動しようと思う。京都で4泊ほどしてから東京に向かう。そこからは大阪、石川、福井と滞在拠点が変わっていく。石川と福井に関するスケジュールはまた追って詰めて行こう。

フライトの予約の際に1つ興味深いことがあった。今のところ搭乗予定のフィンエアーのビジネスクラスの座席指定は誰も行っていないとのことだったので、好きな場所が選べた。これは初めてのことである。いつも必ず誰かがすでに座席指定をしているのだが、今回は自分が一番乗りだったようだ。確かに、このような状況下でヘルシンキから大阪に行く人はほとんどいないのだろう。成田に行く人

であればちらほらいるかもしれないが、大阪に向かう人の少なさを感じた。興味深かったのは、それではなく、座席指定の際にオペレーターの方と行ったやり取りだ。

毎回オランダから日本に行き来するときは、オーロラが見える可能性を考えた座席指定をする。今回もオーロラが見える可能性も考えて、対応してくださったオペレーターの方に、「オーロラが見える側の窓際の席でお願いできますか？」と尋ねたら、「富士山の見える方向ならすぐにわかるのですが…」と言われてお互いに笑った。富士山が見える方向に関してならマニュアルがあるそうだ。私はその場で、運行経路を想像して、こちらの方から口頭で座席を指定させてもらい、進行方向最前列の左側の窓際の席を選んでもらった。

これにて無事にフライトの予約変更がなされ、フィンエアーを使って関空にたどり着けそうでホッとした。Eチケットの発行は遅くとも明日の朝までにはなされるとのことだった。変更したチケットについてはメールで案内はされないらしいので、自分でJALのウェブサイトからダウンロードする必要があると連絡を受けた。明日の昼にでもEチケットをダウンロードしておこうと思う。いずれにせよ、これにて日本の一時帰国が実現されることになり、とても嬉しく思う。フローニンゲン：2020/9/1（火）15:53

6184. 祈りを根幹とした観想的な実践生活と創造の起点

時刻は午後7時半を迎えた。今、空には雲1つなく、見事な夕焼け空が広がっている。ちょうどこれから夕日がゆっくりと沈んでいく。

振り返ってみると、今日もまたとても充実した1日だった。創作活動と読書に存分に打ち込めたように思う。特に読書はとても捗り、今、本日5冊目の書籍を読み進めているところだ。

今日から久しぶりに、マウリツィオ・ポリーニの演奏するベートーヴェンピアノソナタ全集を聴き始めた。ポリーニの演奏するベートーヴェンのピアノソナタはふとしたときに聴きたくなる。今日はそのような日だった。ベートーヴェンの建築的音楽（architectonical music）を建築学の観点から見たらどのように味わえるのだろうか？音楽と建築学の関係について考えながら、建築についても自分なりの観点から探究を進めていこうかと思う。この点については以前にも述べていたと思う。

関心が少しずつ熟成し、思わぬ時に思わぬ形でそれが花開くことが自分の中では多い。いや、これまで全てそのような形で人生が進んできたようにすら思う。その瞬間の関心を常に大切にしていこう。それはいつか思わぬ形で結実していくだろう。

静かな祈りを根幹とした観想的な実践生活。それは霊的生活とも呼べるものである。祈りながらにして創作活動に従事していくこと。祈りと創作を別々にするのではなく、全てを祈りと関連づけた実践にしていこう。祈りというのも大袈裟な行為ではなく、感謝と自己を包摂した利他心に基づいた行為が祈りの一形態であり、そうした行為を絶えず継続していく。

今、遠くの空に気球が浮かんでいる。それはゆっくりと夕焼け空を西に進んでいる。そういえば数日前にも気球を見たような気がする。暑くもなく、そしてまだ寒くもないこの時期が一番気球に乗るのにふさわしいのかもしれない。

小さな我からの囚われから解放される形で絵筆を動かし、曲を作っていくこと。そうすれば、創造を司る原理が働き始める。我執に囚われていると、その原理が働かないのだ。創造は、我執を手放した後の余白から生まれるのではないかと思う。これは本当に面白い。意識が我に囚われると、創造の根幹をなす自発性に歪みや淀みが発生してしまうようなのだ。

真の創造は我執から解放されたときに始まるということを肝に銘じ、絶えず我が溶解する没入の状態で日々の創造活動に従事していこう。そのようなことを思いながら、夜の読書を再び始めていこう。フローニンゲン：2020/9/1（火）19:49

6185. ライフステージの変化と引っ越しについて

時刻は午前6時を迎えた。今、少し空がダークブルーに変わり始めた。

起床してすぐに空を眺めた時、神々しく輝く満月を見た。今は満月が少し移動してしまい、街路樹の裏に隠れてしまっているが、ぼんやりとそのシルエットが見える。太陽の光を反射して輝く満月の美しさには思わず見惚れてしまうものがあった。

めっきり肌寒くなってきたフローニンゲン。今日は最高気温が19度まで上がるようだが、最低気温は7度と低い。今のこの瞬間がまさに7度だ。明日は午前中から天気が崩れるようなので、今日の夕方に近所のスーパーに買い物に行こうと思う。今週の土曜日にハーグから友人が遊びに来るのだが、幸いにも土曜日は晴れとのことである。

先日の予報では小雨マークがついていたが、今確認してみたところ、晴れるようなので何よりだ。今のところ、その翌日の日曜日も午後に隣町のルーワーデンで合流することにしているのだが、日曜日は逆に午後から小雨が降るようだ。このあたりの天気に関しては直前になってみないとわからないというのが正直なところだ。それだけ天気の変化は激しく、予想は難しい。

昨夜ふと、そろそろ今の自宅から引っ越しをするタイミングにあるように思えた。それは突然やって来た思いだった。フローニンゲンの今の自宅には4年間ほど住んでいて、今年の8月から5年目の生活を迎えた。生活環境については申し分ないのだが、もっと静かで自分の取り組みにより集中して打ち込めるであろう場所があることに気づき始めている。

今の自宅に大きな不満はないが、少しばかり違和感が芽生えていることは確かだ。端的には、自分のライフステージが変わりそうな気配がしているのだ。ライフステージが変われば、住む家や場所が変わるのはあって然るべきことかと思う。

オランダ永住権と欧州永住権の取得のためにあと数年はオランダで生活をしていきたいと思う。以前は、スキポール空港にアクセスしやすい南オランダのどこかの街に引っ越そうかと思っていたが、やはり自分はフローニンゲンの街が好きであり、フローニンゲンの中で引っ越しをしようかと思い始めた。今よりもより広めであり、さらにより落ち着けるような場所に引っ越そうかとふと思ったのである。来年のどこかのタイミングで引越しをして、心機一転また新たな気持ちでフローニンゲン生活を送ろうかと思う。そのような思いが湧いたので、早速家探し専用のウェブサイトを通じて調べてみた。すると、偶然にもとてもお洒落で小綺麗な良さそうな物件を見つけてしまった。

その物件は建築されて真新しいようでり、モダンな感じが漂っている。目の前には小さな公園があり、緑もすぐ近くにある。それでいていつもお世話になっている近所のスーパーと街の中心部のオーガーニックスーパーにもすぐに行ける距離なので、とても魅力的に映った。おそらくこの物件は

すぐに借り手が見つかるだろう。物件に関する条件はさほど多くなく、今よりも大きく綺麗であり、バスタブと家具が付いていて、オーガーニックスーパーに歩いて行ける距離である、というぐらいの条件しかない。早速そのウェブサイトに登録し、それらの条件を入力して、条件に合致する物件情報が届くように設定しておいた。ここからしばらく物件についてアンテナを張っていこう。

最近は色々と幸運続きであり、心機一転新しい生活を始めるにふさわしい良い物件にも何かのご縁で巡り会うような気がしている。今の家には4年住んだとこともあり、そろそろ住環境の変化が必要な時期かと思う。それは自分の深層部分が欲しているものであり、健在意識の私ではなく、無意識の私が欲しているようなのだ。

オランダ国内の引っ越し、しかも同じフローニンゲン内の引っ越しであれば、フローニンゲンの引っ越し業者を使おうかと思う。今の家も家具付きであるから、家具を運んでもらう必要はなく、段ボールをもらい、それらを運んでもらうだけだから楽だ。

今の家の契約書を見ると、退去に際しての連絡は1ヶ月前とのことである。人生がまた新たな方向に大きく動き始めている。それはとても肯定的かつ幸運な変化である。諸々の幸運な出来事が人生で連続して起きていて、今年や来年は大きな変化の年なのだろう。幸運な波に乗る形で、その波が向かうところに運ばれて行こうと思う。フローニンゲン：2020/9/2（水）06:21

6186. 他者や社会の幸福と自分の幸福

時刻は午前6時半を迎えようとしている。今、辺りが随分と明るくなり、街路樹の姿もくっきり見え始めていた。

昨夜就寝中にベッドの上で横たわっていると、なぜか今アパートの一緒の棟に住んでいる住人たちの幸せを祈った。私が今住んでいる棟には4世帯ほどが生活をしていて、全員顔見知りだ。上の階に住むイェルは最近フリースランドから引っ越して来た。彼はとても朗らかな好青年だ。

下に住む大柄なオランダ人男性は、働きに出かける際によく歌を口ずさんでいる。最初は静かに出かけて行って欲しいと思ったものだが、逆に言えば、歌を思わず口ずさめるほどに幸福なのだと最近思うようになった。

今生活しているアパートの住環境はとても静かだが、ごく稀に夜に笑い声などが聞こえてくることもある。そうした笑い声も見方によっては騒音かもしれないが、笑い声が出てくるぐらいにその人は幸福なのだと思うと、今の家の周りには幸福が満ち溢れているのだと思った。

歌声や笑い声が聞こえてくるというのは、周りの人たちが幸福感を感じている証なのではないかと思う。周りの人たちが幸福であればあるだけ自分も幸福を感じる。これは本当にそうなのだ。とても当たり前のことのように思えるかもしれないが、そうした当たり前のことを少しばかり忘れているような自分がいたように思える。小さなところで言えば、近隣住民が幸福であることは、自分の幸福に密接に結びている。

一体誰が、陰湿で不幸せそうな表情を浮かべた人たちに囲まれて生活をしたいと思うだろうか。周りの人の幸福あっての自分の幸福である。もちろん、自分が自分なりの幸福をまず感じることは大事だが、そこに閉じてしまってはならない。そうした自閉的な幸福は、周りの人たちが不幸せであれば、いつかきっとひっくり返されてしまうような脆弱な幸福なのだ。

絶対的な幸福とは、周りの人たちの幸福を前提として、他者の幸福が生み出す大海の中で自分なりの幸福感をしみじみと感じることなのだと思う。そう、他者の幸福は大海のようなものであり、自分の幸福は大海の中で深く寛いでいる時に感じられ、見出せるものなのではないかと思う。近隣住民の歌声や笑い声は、幸福の証なのだ。それは彼らにとっての幸福であり、同時に自分にとっての幸福でもある。

そのようなことを考えていると、近隣住民だけではなく、フローニンゲンに住む全ての人たちの幸福を祈った。幸いにも、フローニンゲンの街はとても穏やかで、住民たちの表情も総じて明るく、幸福感の高い街であることをこの4年間感じてきた。だからこそこの街で4年間生活をし、5年目の生活を迎えることにしたと言っても過言ではないだろう。

フローニンゲンの住人たちの幸福を祈った後、必然的に私の祈りの範囲は拡張され、オランダ全土へ、そしてヨーロッパ全土へ、地球全土へと広がって行った。最後には宇宙全体へと祈りを拡張させて行こうと思ったが、どうやら今の私の祈りの次元は地球どまりのようであり、宇宙全体の幸福を祈願する際の自分の祈りはどこか力が感じられなかった。これもまた自分の意識の成熟度合いを表

す現象かと思う。いずれにせよ、他者や社会の幸福が自分の幸福と密接不可分に関係しているということが明明白白な体験として知覚された以上、他者や社会の幸福の実現に向けて、日々小さな取り組みを継続していこうと思った次第であった。

満月はどこかに消え去り、一点の雲もない青空が広がっている。自分の心は青空の如し。とても広大で穏やかな心がここにある。そして自分は、もはやそうした心を超えた存在であるということがありありと認識される。フローニンゲン:2020/9/2(水)06:46

6187. 道ゆく人の口笛より/ベルナルド・リーベフートについて

今、書斎の開けられた窓の方に近寄って外の景色を眺めてみようと思ったところ、目の前の通りを歩く人の口笛が聞こえて来た。ちょうど先ほど下の階に住む人の歌声について書き留めていたように、道ゆく人の口笛が聞こえて来た時に、幸福感を感じる自分がいた。

思わず口笛を吹いてしまうというのは、その人が何かしらの嬉しさや幸福さを感じている証左だろう。オランダ人はよく口笛を吹いたり、思わず歌を口ずさむ傾向があるようであり、私も口笛を吹きながら買い物に出かけることがよくある。それはもう本当に思わず出て来てしまうものなのだ。そこから、真の嬉しさや幸福さというのは自ずと内側から滲み出て来てしまう性質を持っていることが見えてくる。真の嬉しさや幸福には自発性があるようなのだ。そのようなことを窓辺で考えいていた。

自宅のゴミ箱の付近に、今大小様々な段ボールが随分と増えた。それは先日注文した書籍を梱包していたものである。昨日は随分大量に書籍が届いた。それもそのはずで、今月は合計で75冊ほど書籍を注文したのだ。

昨日はイギリスとオランダの書店から書籍が届けられ、いつものように、それらの書籍が届けられた記念日を書籍の冒頭のページに書き込んでいった──それを購入した場所が自宅以外であれば、書店の名前や街、そして国などを書き込むようにしている──。

自分がいつその書籍と出会ったのかを書き留めること。それはもう長らくの習慣であり、初読を始めた日や再読を始めた日についても書き込みをしている。書物は自分の人生史を映し出すものなの

だ。書物と一緒にゆっくりと歩んでいくこと。そしてその歩みの経過をその書物の中に刻印していくこと。そうしたことをもう随分と長らく行っているように思う。

今日の読書は、フランスの哲学者ジャン･フランソワ･リオタールの“Libidinal Economy”をまず読み進めようと思う。昨日は、結局5冊ほどの初読を一気に終えることができた。リオタールのその書籍の中身をパラパラ見る限り、初読は今日中に終わるだろうが、2冊目の書籍を読み終えることができるかどうかはわからない。2冊目の書籍もまた経済学に関するものにするのであれば、“Capitalism without Capital: The Rise of the Intangible Economy”を読む。

もし経済学書を選ばないのであれば、霊性学と成人発達学を絡めた“Phases: The Spiritual Rhythms of Adult Life”か“Phases: Crisis and Development in the Individual”を読みたい。こちらの著者のベルナルド･リーベフート（Bernard Lievegoed (1905-1992)：オランダ語の発音に忠実になれば「ベルナルド･リーベフート」であり、英語であれば「バーナード･リーベゴード」という発音になるだろう）は、オランダのシュタイナー研究者として非常に有名であり、偶然ながらある日本人の方から先日教えてもらった学者である。

リーベフートは元々医者なのだが、シュタイナーの思想に感銘を受け、その思想を組織開発や社会の幸福の実現に適用していった。今回購入することはなかったが、リーベフートの“The Developing Organization”や “Managing the Developing Organization”といった書籍、さらには“Towards the 21st Century: Doing the Good”などは今後購入することを検討したい。まずは上記の2冊を読み進めていく。それら2冊の書籍に取り掛かった後に、美学や音楽関係の書籍を読もうかと思う。本当に充実した読書が静かに進行していることを有り難く思う。フローニンゲン：2020/9/2（水）07:12

6188. 今朝方の夢

時刻は午前7時半を迎えた。この時間帯になると、朝日が燦然と輝いていて、街が美しく踊り出しているかのようだ。小鳥たちの鳴き声もそれを祝福しているかのようである。今朝方はまだ夢について振り返っていなかった。夢の振り返りをした後に、いつものように創作活動と読書に励んでいこうと思う。

夢の中で私は、小中高時代の親友（NK）と話をしていた。最初はある話題について和気藹々と話をしていたのだが、途中で親友が神妙な顔になり、話題を変えた。親友が少し暗い表情をして、私にあることを打ち明けて来てくれた。何やら、高校時代の友人（HH）から私が依頼を受けていた仕事について、その友人がその金額について不満を漏らしているとのことだった。

私はその友人から受けた仕事に対して75万円ほどの対価をもらっていたのだが、どうやら友人はそれが高いと感じていたらしく、友人の奥さんとその金額について、そしてさらには私に対して何やら陰口のようなことを述べていたということを親友から聞いた。どうやら、今後自分に仕事を依頼するのはやめようということを話していたらしいと聞き、それに対して私は特に何も感じなかった。というのも、仕事にかかる時間と仕事の質を考えれば、その請求金額ですらも随分と安いはずなのだが、単に請求金額だけで判断するのであれば、今後彼からの仕事が消滅することはむしろ有り難いことだった。自分の仕事に対してきちんと評価をしてくれる人、そしてお互いに気持ち良く働けるような人と協働したいと改めて思った。

次の夢の場面では、私は日本のある大都市にいた。おそらくそこは東京だと思われるが、それは定かではない。私は高速バスに乗っていて、今からある高速道路の料金所に入っていくところだった。そこに向かうまでの道のりが変わっていて、ジェットコースターのような高度と入り組んだ道を持っていた。大きく右にカーブしてうねって行ったとき、街の中心部の方に不穏な煙が上がっている姿が見えた。私は直感的に、街に怪物が現れたのだと思った。すると、煙の向こう側から、得体の知れないような巨大な怪物が現れた。私はその怪物を見て、それは人間の欲望を取り込みながら巨大なものになっていったのだとわかり、それはもう手に負えないほどの大きさになっていた。

最後の夢の場面では、私は前職時代のオフィスのトイレの中にいた。そこは広く綺麗なトイレであり、トイレから出ようとしていた時に偶然ある上司に出会った。その上司の方は同じ大学出身ということもあり、私に対してとても優しかった。上司の手元を見ると、書籍や資料をたくさん抱えていて、どうやらトイレの個室の中で仕事をするようだった。

すると上司は何かを思い出したかのように、一度オフィスに戻った。するとすぐさま、上司は椅子を持って来てトイレに戻って来た。どうやら本格的にトイレに籠もって仕事をするようだった。最後に、

普段は温厚な上司がふと、若い社員の働き方に対して少し愚痴のようなことを述べた。上司の不満を最後まで聞いたところで上司と別れ、私は再びオフィスに戻った。

自分の席に戻ると、後ろの席に座っていた女性の上司が私に話しかけてきた。依頼を受けていた仕事の進捗について、上司は今私がどのような進捗にあるのかを確かめてきた。その案件については、その女性の上司の上司である先ほどの男性の上司にすでに報告済みのはずなのだが、その連絡がまだ行き通っていないようだった。その女性の上司は少し焦りと不満の表情を浮かべていたので、私はその方にある案件の進捗状況について報告をした。

すると、なぜか小中高時代の幼なじみの女性友達(YY)も同じチームに所属していて、彼女は私が重要な書類を全てシュレッダーにかけて捨てたとその女性の上司に報告し始めた。私はそんなことはしておらず、机の上にあるであろう資料を再度提出しよと思ったところで、彼女が最終的なデータ入りの資料を提示した。そこで私は、彼女が自分のことをライバル視していることに気づき、こうした関係があると、仕事上チームに迷惑をかけそうだったので、会社を近々辞めようと思った。本音で言えば、今すぐに辞めようと思っていた。フローニンゲン:2020/9/2(水)07:56

6189. 引っ越しによる再出発/6Gの時代に

時刻は午後7時半に近づきつつある。今日もまた穏やかな夕日がフローニンゲン上空に浮かんでいる。

本日もまたいつもと同じぐらいに充実した1日だった。創作活動と読書に旺盛に励み、小さいが確実に自分が何かを深めていっていることを実感する。その根拠は、その実感が目には見えないことである。それがもう目には見えないほどに微細なものであるということが深化の実感の裏づけになっている。

改めて、日記の執筆は創作活動の1つだと思った。それは言語的な創作活動である。自己は創作する生き物であり、言葉と感覚が無限に生成される過程の中にそれを言葉の形で把捉·再梱包することによって、自己が深化を進めていく。

今日の午後にふと、フローニンゲン大学を見学しにやって来た4年前の冬のことを思い出した。その時はアメリカから引き上げてきて、1年ほど東京に住んでいた頃だった。私は、フローニンゲン大学の教授人たちと顔を合わせるためにキャンパスにやって来た。あの日は雪が積もっていて、足元が悪かったのを覚えている。

フローニンゲンの中央駅から大学まではほぼ一直線で迷いようがないのだが、雪が積もっていたせいか、視界が悪くて私は迷ってしまった。そのため、どこかの化粧品屋のような店に入り、大学の方向を教えてもらい、なんとか無事に大学に辿り着けたのを覚えている。あれから4年間の月日が流れたのだ。気がつけばフローニンゲンでの生活も5年目となり、成人以降、5年間同じ場所で生活するのは今回が初めてだ。

今朝方の日記で書き留めたように、オランダ永住権と欧州永住権を取得するまではフローニンゲンで生活をしていこうと思っている。そして来年のどこかのタイミングで、フローニンゲン内で引っ越しをしようかと考えている。

引っ越しによって、不必要な物を処分するという物質次元だけの手放しだけではなく、精神的な意味での手放しも起こるような気がしている。それは過去の体験からもたらされた気づきである。端的には、引っ越しを行うことは、自己にとっての再出発となり、他の方法にはない浄化と変容をもたらしうる。ひょっとしたら来年の早いタイミングで、そうした再出発を実現させることになるかもしれない。今よりもさらに落ち着いた場所に引っ越し、今よりもより一層自分のライフワークに打ち込んでいく。

その他にも、5Gの後にやって来る6Gの時代について考えていた。通信速度が5Gよりも50倍も早くなると言われている6Gの時代において、6Gの中心の技術であるヴァーチャルリアリティーのテクノロジーによって、自分のデジタルアートをホログラムで浮かび上がらせ、それを手触り感を持って感じているような姿が想像できた。

デジタルアートをホログラムで部屋に飾るというのは面白そうだし、そこに音楽も組み合わせることができたらと思う。仕掛けとして、ある絵画に対応させる形で音楽をそこに埋め込んでおき、何らかの信号によってその音楽が再生される形にしておく。まだ5Gの時代すら完全に到来していないのだが、6Gの技術によって、絵画体験や音楽体験もまた変容するのではないかと思う。それこそ、自宅

が自分の作品の美術館やコンサートホールになることも夢ではないだろう。その日の実現に向けて、日々自分の内的感覚を絵や音の形にしていこう。フローニンゲン：2020/9/2（水）19:31

6190. ゲオルク・ジンメルの貨幣論/ゆとりや余白の大切さ

時刻は午後7時半を迎えた。そういえば、ここ最近は夕方にあまり小鳥たちの鳴き声が聞こえてこない。それを少しばかり寂しく思いながら、街路樹がそよ風で揺れる姿を眺めている。

本日も続々と書籍が到着した。合計で6冊届けられた。中でも、ゲオルク･ジンメルの“The Philosophy of Money”では、図表が一切なしで600ページ弱にわたって貨幣についてのジンメルの思想が展開されている。それを見て、ジンメルを貨幣の研究に駆り立てた何かについて知りたくなった。そうしたものがなければ、こうも何かに取り憑かれたかのように貨幣について探究ができるはずがない。

そうした熱感は人に伝播し、過去の偉人から学ぶというのはおそらく、コンテンツの次元で学ぶというよりもむしろ、こうした熱量を受け取ることにその本質があるように思う。いずれにせよ、ジンメルの貨幣論の背後にある彼の創造を司る根源を知りたくなり、今後は彼の貨幣論の中身だけではなく、そうした点も探求していこう。

この書籍と合わせて、“Token Economy: How Blockchains and Smart Contracts Revolutionize the Economy”に関する書籍を読むことによって、これからの貨幣経済について考察を深めていこう。現在、各国の中央銀行が量的緩和を行っていて、世界にカネが際限なくばら撒かれている。そうした様子に合わせて、種々の相場に動きが見られるので、今後の資産運用についても色々と考えるタイミングにある。

夕方に、ゆとりや余白、あわいから全てが生まれることについて考えを巡らせていた。そこに創造の源があり、ゆとりや余白、そしてあわいは治癒と変容をもたらす。本当に興味深いのだが、創造･治癒･変容は、スペースがないところからは生まれない。現代社会の時代精神や制度によって、小さな自我は自分自身の内的空間を埋めることに躍起になるが、心理学者のフィリップ･クッシュマンが提唱した「空虚な自己」という言葉にあるように、心のゆとりを埋めることに躍起になればなるほど、空

虚な自己になっていく。そもそも、内的空間はありったけに満たされているのだ。それを見逃してはならない。

創造的な直感というのは、小さな自我から生まれるものではなく、自我の囚われから解放され、無私の状態に至って初めて生まれるものだ。私が常々、自然言語を媒介させない創作活動に従事しているのは、小さな自我は絶えず自然言語をもとに活動をするので、言語束縛から逃れ、無私の境地を感じながら、自分の内側に余白を生み出したいからというのも1つの理由だろう。

心のゆとりと人口密度について改めて考えていた。ひょっとすると、日本の人口密度の高さと日本人の心の密度はフラクタル構造になっているのかもしれない。つまり、日本の人口密度に相まって、日本人には、成長･発達、そして人生を深めるために必要な空間が不足しているのかもしれない。絶えず何かでビッシリ埋まっている感覚。それを感じたことはないだろうか。

何かに駆り立てられながら、余白を必死に何かで埋めていこうとするその感覚。その何かというのは、小さな自我であり、同時にそれが生み出す不純物である。余白と余裕。それらを大切にした生活を明日からも続けていこう。フローニンゲン：2020/9/2（水）19:43

6191. 京都の訪問/本日の読書の予定

時刻は午前5時を迎えようとしている。この時間帯はまだ辺りが真っ暗だ。外はとても静かであり、物音は何もない。小鳥たちも鳴き声を上げておらず、静寂さと闇だけがそこにある。

気がつけばもう9月であり、10月中旬の一時帰国の日まであっという間に時間が過ぎていくのではないかと想像する。

今回の一時帰国では、やはり京都にも滞在しようと思う。実に久しぶりの京都だ。高山寺や鞍馬山に足を運んだ時には、そこで絵でも描こうかと思う。風景を描くのではなく、その場で沸き起こる内的感覚を絵にしていく。合わせて作曲もできたらいいが、パソコンを持って移動するのは重たくなってしまう。持ち運びに不便しないiPad Proに今使っている作曲ソフトをダウンロードすることは可能だが、それに容量を取りたくなく、またパソコンの方が操作が楽なので、引き続きiPad Proは絵を描くために使っていこう。それを持って高山寺や鞍馬山に出かけていこう。

当初は、高山寺か鞍馬山の近くの旅館にでも宿泊しようと思っていたが、色々と移動を考えると、やはり京都駅近辺のホテルの方が便利そうである。そこであれば、高山寺にも鞍馬山にも行きやすく、何よりも京都の中心部にある美術館や博物館も巡りやすい。そうしたこともあり、宿泊先は京都駅近辺のホテルにしようかと思う。できるだけ和を感じられるようなホテルを選ぼう。いくつかすでに目星のホテルがある。

今日もまた創作活動と読書に励んでいく。読書に関しては、テオドール･アドルノがキルケゴールの美学について解説した”Kierkegaard: Construction of the Aesthetic”をまず読んでいこう。その後に、”Habermas and Aesthetics: The Limits of Communicative Reason”の書籍を読むことができたらと思う。後者は、ヨルゲン･ハーバマスの美学に関するものであり、今日は美学関係の書籍を読む日となる。おそらく今日はその2冊の初読を読むことにとどまるだろう。

今日もまたいくつか書籍が届くかもしれない。届けられた書籍は初読を早々と終え、そこからは繰り返し手持ちの書籍を読み進めていく。確かに毎月何かしら新しい書籍を購入しているが、この冬は少し購入の分量が低くなるような気がしている。この秋の一時帰国の際には和書を15冊程度オランダに持ち帰ることができたらと思う。それらの書籍を含めると、引き続き新しい書籍を読み進めていきながらも、既存の書籍を何度も繰り返し読んでいきたいと思う。

昨日も改めて自宅の書籍群の背表紙を眺めてみたところ、良書ばかりがそこにあることに気づき、それらは繰り返し読んでいくことによって、真に自分の血となり肉となるのだろうと思った。フローニンゲン：2020/9/3（木）05:08

6192. 今朝方の夢

時刻は午前5時を迎えた。今、一台の車が目の前の通りを過ぎて行った。それ以外の音は今のところ聞こえてこない。

今朝方はいくつか印象に残る夢を見ていた。夢の中で私は、チュニジアのような北アフリカ諸国のリゾート地にいた。街は砂埃が立つような乾燥具合であり、暑さもあった。私はエキゾチックな街の中を好奇心に見開いた目をして歩いていた。すると、日本人の姿をちらほらと見かけた。どうやら彼ら

は企業から派遣された駐在員の人たちのようであり、彼らの子供たちの姿も街中で随分と見かけた。

私はふと、その街の寺院に足を運んだ。すると、2人の僧侶が鐘を鳴らしながら何か話をしている姿を目撃した。私は彼らに近寄り、挨拶をしたところ、彼らは最近の若い僧侶たちの信仰心について話していた。どうやら、最近の若い僧侶の中にはあまり熱心ではない人たちがいるらしい。

2人の僧侶は、それに対してどうしたものかと少し嘆いていた。2人の話を聞いた後、私は寺院を離れ、再び街中を歩き始めた。北アフリカの雰囲気が私を包み、ある種の恍惚とした感覚に陥った。気がつくと私は、高校時代にお世話になっていた英語の塾の教室にいた。先生の授業がちょうど始まろうとしており、別の高校の野球部に所属する友人とペアになって、英文和訳の最初の問題に取り組むことになっていた。

いざその問題に取り組んでみると、意外と難しく、苦戦を強いられた。私の隣にいた小中学校時代の親友（KF）と話をしていると、いつの間にか問題を解く時間が終わっていた。不本意な形で先生に解答を提出することになってしまった。先生はすぐさま採点と添削をし、採点結果は10点満点中4点だった。

添削結果については、それが書かれたファイルを携帯に送ってもらう仕組みになっていて、すぐにそのファイルを開こうと思った。すると、私の携帯はガラケーであり、ファイルの重さからかなかなかファイルが開けなかった。その様子を見ていた先生は、隣いにる親友にファイルの開き方を教えてもらいなさいと述べた。私はファイルの開き方は知っていて、単にダウンロード速度の問題だったのだが、一応携帯を親友に渡した。

親友に渡したタイミングでファイルを開くことができ、見るとそこには酷評が書かれていた。先生はそこから口頭でも添削結果についてフィードバックをし始め、その間に問題の解説はなぜか私の父が黒板の前で行っていた。先生は、父の解説の見事さに少し焦っているようだった。正直なところ、ファイル上の先生からのコメントは大して参考にならないと思った。そこで夢の場面が変わった。

次の夢の場面もまた先ほどの北アフリカ諸国のリゾート地だった。宿泊先のホテルのミーティングルームに私はいて、そこで小中高時代の女性友達たちと話をしていた。彼女たちと小さな円になっ

て、何かをシェアしていた。すると、私の左隣に見慣れない女性がいた。彼女は、私の右隣にいた女性友達（KE）の友人とのことだった。

どういうわけか、私は挨拶もそこそこに、彼女が理系か文系かを尋ねたところ、「理系ですけど、その質問は大物か小物かを区別しようとしていませんか？」というようなことを言われた。私は決してそんな差別をしていなかったのだが、彼女はそのように受け取ったらしい。そもそも、彼女の頭の中に理系の女子は大物であって、文系の女子は小物であるという差別があるのではないかと思った。そこからしばらく円形でみんなと会話をし、ちょっと飲み物でも買いに行こうとしたところ、その女性が私に謝ってきた。

どうやら少しイライラしていたので先ほどあのような言葉を述べてしまったらしかった。私は別に気にしていなかったので、それじゃあイライラを解消するために、チョコレートとコーヒーでも売店に買いに行きましょうと提案した。すると彼女は乗り気になり、私と一緒に売店に行くことにした。売店に到着し、早速コーヒー売り場に向かったが、なかなかコーヒーが見つからなかった。

実はつい先ほどこの売店でコーヒーを購入したはずなのだが、どういうわけか先ほどの場所にコーヒーが置いていないように思えた。私がコーヒーを探していると、彼女はUFOキャッチャーのようなゲームに関心を示し、何か取りたいものがあるようだった。すると、私はコーヒーコーナーを見つけ、そこに良さげなコーヒーが置かれていることを嬉しく思った。私はすぐに彼女に声をかけ、一緒にコーヒーを選び始めた。

すると、そのリゾートホテルのお偉いさんが売店にやって来た。そのお偉いさんは結構な年齢になったおじさんであり、彼は彼女に声を掛けた。どうやらそのおじさんは彼女に関心があるようだった。私はちょっとそれを君悪く思ったし、彼女も君悪そうにしていた。そうしたこともあり、私たちはすぐにコーヒーを選んでその場を後にしようと思った。

するとどういうわけか彼女がその場から消えていて、そのおじさん風のお偉いさんが、白い紙でできた巻物を手に持っていた。巻物の中に血のようなものが滲んでいて、彼は彼女を巻物の中で殺害し、それを1つの芸術作品にしたのだと私は気づいた。彼女が殺害されたことに対して私の中から

怒りの感情が湧き、そこからどうやってそのお偉いさんに報復しようかと考え始めた。そこで夢から覚めた。フローニンゲン：2020/9/3（木）05:35

6193. 芸術に関する難解な問いと出会って/可能世界と芸術/遊びとゆとり

時刻は午後7時半を迎えた。今は午後から降り始めた雨が引き続き降っている。静かな雨音が外の世界に鳴り響いている。

振り返ってみると、今日もまた読書が大いに捗った。結局今日は、4冊の書籍の初読を終えた。今朝は4時に起きたので十分な時間を読書に充てることができたことを嬉しく思う。今日の読書から得られたことは多々あり、それらを少しずつ自分の言葉でまとめていこうと思う。今日の読書から考えさせられたことの一つとして、哲学者のネルソン･グッドマンの有名な問い、“What is art?”ではなく、“When is art?”という問いにしばし固まったことを挙げることができる。

グッドマンは、「芸樹とは何か？」と問うたのではなく、「芸術とはいつなのか？」「芸術体験はいつ始まるのか？」という問いを投げかけた。その問いの直後に、ロイ･バスカーの批判的実在論をもとにした“Where is art?”という問いが書かれていて、それに対して再度固まった。それらの問いに対する自分なりの暫定的考えを醸成していこう。今答えることのできない問いに答えていくこと。それが内的成熟のプロセスである。

芸術が個人や社会の治癒･変容に果たす役割について考えさせられる書籍を読んでいたときに、改めてハーバマスとバスカーの思想体系から芸術の役割について考えていこうと思った。芸術作品の鑑賞のための美学ではなく、社会実践としての美学を優先して探究していく。もちろん、今よりもさらに芸術体験を深めていく上では前者の美学を学んでいくことにも意義がある。だがそれだけ終わりにしてはならない。兎にも角にも、社会実践としての芸術について焦点を当てていこう。

そこからふと、以前読んでいた可能世界論に関する書籍のことを思い出した。芸術は、今この瞬間のリアリティを映すだけではなく、未だかつてないリアリティを想像し、そして創造することにも寄与していく。そう考えてみたときに、芸術は無数の可能世界を創造することに寄与していくことができるのではないかと思った。単なる空想の産物ではなく、それを出現する未来として創造することも可能なのではないかと思う。そうした点にも芸術の寄与する領域がありそうだ。

遊びとゆとり。ゆとりが遊びを生み出し、遊びがゆとりをもたらすという相互互恵関係について考えていた。日々の創作活動は確かにゆとりがあるから実践できているという考え方もあるが、むしろ創作活動に従事することがゆとりと遊びを生んでいるように思う。あるいは、それそのものがゆとりと遊びの産物であり、創作活動と遊びとゆとりは三位一体のものに思えてくる。

今夜はもう少し曲の原型モデルの作成に時間を当てたい。写譜としての原型モデルの作成を日々小さく進めてこう。毎日1曲でも良い。現在進めている集中的な読書が落ち着く時期を迎えたら、また写譜の量を増やすのも良いだろう。小さく少しずつ進むこと。それを明日も心がけていこう。フローニンゲン:2020/9/3(木)19:46

6194. ヴァーチャル美術館/内的対話と内的感覚の変容

時刻は午前5時半を迎えた。今日も満月が見える。辺りはまだ真っ暗だが、そのおかげもあってか満月がより一層輝いて見える。

今この瞬間はとても肌寒いが、今日は19度まで気温が上がるらしい。今日の午前中に少し小雨が降るようだが、それはすぐに止み、午後には雨は降らないという予報が出ている。

ちょうど今日は、半年に一度の歯科検診の日であり、午後3時からの予約なので、雨が降っていない時間帯に行けそうで何よりだ。歯医者での検診を終えたら、その足でオーガニックコーヒー豆を買いに専門店に行き、そこからABN AMRO銀行に向かう。銀行ではモバイルアプリに関する問題の解決を依頼する。その帰りにオーガニック食品店に立ち寄って帰ってこようかと思う。歯医者から見ると、ちょうどフローニンゲンの街の中心部を時計回りに行って帰ってくるようなイメージだ。それは程よい散歩になるだろう。

一昨日に、6Gの時代になったら、自分の作品をもとにしたヴァーチャル美術館を作り、それを家の中で楽しみたいというようなことを日記に書いていたように思う。そういえば、以前ズヴォレの美術館を訪れたときに、いつか寄付か何かを通じて美術館を作りたいなと考えていたことを思い出した。物理的な美術館を作ることができなかったとしても、ヴァーチャルの美術館なら近い将来比較的簡単に実現可能かもしれない。そのようなことを小さく夢見る自分がいる。

昨日、アーノルド･ショーンバーグが執筆した作曲理論書を参考にして学習をしていたときに、作曲家としてというよりも、音楽理論家としてのショーンバーグに敬意を表した。その理論書の密度はとても濃く、本当に多くのことを得ている実感がある。もちろん、今はそのほとんどを理解することができていないのだが、それらを1つ1つ理解していったら、きっと今とはまた違う次元で作曲ができるようになっているのだと思う。それを思うと、高揚した気分になる。

現在、作曲理論や音楽理論に関する書籍が手元に随分と増えた。核にしていく文献と補助的に使う文献に分かれるだろうが、とりあえず手持ちの書籍に書かれている内容は全て理解し、それらの知識を体現させる形で実際の作曲に適用できるようになっていきたいと思う。

芸術作品の鑑賞や創作活動を通じて、内的対話と内的感覚の双方を変容させていくことについても考えていた。個人の治癒と変容において重要なことは、内的対話と内的感覚の双方が質的に変化することである。芸術作品の鑑賞や創作活動を通じて、そうした変化が自分の中で起きているのを実感する。あとはこの変化を焦らず、しかし絶え間なく経験していくことを意識していこう。フローニンゲン：2020/9/4（金）06:03

6195. 今朝方の夢

時刻は午前6時を迎えた。空がようやくダークブルーに変わり始めた。まだ辺りはほぼ真っ暗であり、静けさに満ちている。

今のこの環境も素晴らしいが、さらに落ち着いた場所がフローニンゲンの中にあることをこの4年間の生活を通じて知ったので、引っ越しについては引き続き念頭に置いておく。願わくば、この間見つけた物件のようなものが引き続き出てくることである。いざ自分が引っ越しを決断したときに、きっと何かのご縁で素敵な家と出会うことができるような気がする。

それでは今朝方の夢について振り返り、今日も創作活動と読書に励んでいこう。夢の中で私は、ヨーロッパと日本が混じったような雰囲気を持つ街の高校にいた。その学校の造りはとてもモダンだった。その学校は、母方の叔父が卒業した学校らしく、私はその学校を見学しに来ているようだった。学校の敷地に入り、体育館に入ったとき、そこに全校生徒が集まっていて、何かイベントを行っていた。どうやら今日は、卒業生の叔父がやって来ることを記念して、叔父に対するサプライズ

イベントがそこで行われているようだった。すると突然、拍手が湧き起こり、体育館の入り口を見ると、叔父が颯爽と現れた。叔父の顔には笑顔が浮かんでいて、何かスターのような雰囲気を発しながら体育館のステージ上に向かって行った。

すると一瞬にして場面が変わり、私は叔父と共に体育館ではなく、学校のどこか小さな部屋の中にいた。そこは職員室の隣の部屋のようだった。すると、叔父が高校3年生のときにお世話になっていたらしい担任の先生が部屋に入ってきた。叔父と先生は懐かしい昔話をそこから始め、2人はとても楽しそうだった。

先生の話によると、叔父は目立った存在だったらしく、その学校は私服を許可していたので、叔父の私服はお洒落だったようだ。最後に先生は、叔父が卒業間際に学校を休んで好きなことをしていたことに関して懐かしく話をしてくれた。私は2人がそこからもさらに話をしたいだろうと思ったので、その部屋をそっと抜け出した。中庭に出てみると、そこはとても美しかった。よく手入れがされていて、これが高校の庭園かと思わず唸ってしまうぐらいに立派だった。

中庭を抜けようとしていると、遠くの方で女子学生たちが自分の噂をしていることに気づいた。どうやら自分の知性と面白さについて話をしているらしく、意外と好評価であることがわかった。すると、私の後ろから自分の名前を呼ぶ声が聞こえてきた。振り返ると、そこには小中学校時代の女性友達（AU）がいた。彼女の雰囲気がガラリと変わっていて、彼女の容姿は欧米人のように見えた。その変化については特に言及せず、彼女とそこで軽く立ち話でもしようと思っていると、彼女の方からこれから学校カフェに行こうと持ちかけられた。

何やら、ボルダリング好きの別の女性友達（SA）と一緒にこれからボルダリングに行くらしく、私もどうかと誘われ、その友人が用事を終えるまでカフェで時間を潰そうとのことだった。ちょうど私もボルダリングジムに行こうか迷っていたところだったで、ぜひ一緒に行こうということになった。カフェに行く前にトイレに行っておこうと思ったので、トイレに立ち寄ると、急にトイレが混み始め、小便をする便器の前に列ができ始めた。そこでなぜか男子生徒たちが小便を掛け合い始め、私もそれに巻き込まれ、自分にも誰かの小便が飛び散ってきた。見ると、そこで悪ふざけをしていたのは、大抵私の高校時代の友達たちだった。それほど被害を受けることなく無事にトイレから出ると、すでにもう1人の女性友達もやって来たようだった。そこからは3人でジムに向かうことにした。

次の列車がやってくるまでに時間がなかったので、駅まで自転車で行こうということになった。どういうわけか、私は自分の自転車が近くになかったので、2人には先に駅に向かってもらうことにした。最悪、現地で落ち合おうということを伝えた。

そこでまた場面が変わり、私の体はもうボルダリングジムにあった。結局自転車を探すことに随分と時間を使ってしまったので、ボルダリングを楽しむ時間があまりなかった。時刻はもう夜になっていたのだ。私は、自分ではそれほどボルダリングをすることをせず、他の人たちがボルダリングするのをよく眺めていた。中でも、大学のボルダリング部に所属している人たちの様子を眺めていた。

彼らは一風変わった形でボルダリングの練習をしていた。具体的には、新体操のような要素を取り入れ、芸術性のある身体動作でボルダリングの課題に挑戦していたのである。そのようなボルダリングの仕方もあるのかと私は感心しながら眺めていた。すると、ボルダリングが得意な1人の女性友達の方が、本日最後の挑戦をすることになった。その前に、小中学校時代の男性の友人がその課題にトライしたらしかったが、最後の難所に向かってジャンプしても全然届かないようだった。しかし、彼女はその難所にもう手が掛けられるような状態になっていたので、最後の挑戦は見ものだと思った。私は彼女の勇姿を見守ろうと思った。するとそこで夢の場面が変わった。

最後の夢の場面では、先ほどの学校がある国の税関担当の外国人オフィサー3人と話をしていた。私が彼らと話をしていたのは、小さな個室のような場所だった。チーフオフィサーのような人が私に色々と質問を投げかけきて、あとの2人は見張り役なのか、全く何も喋らなかった。チーフオフィサーに資産状況を伝えると、彼は笑みを浮かべ、もっと資産があるだろうと述べた。自分は正しく申請したのだが、そのオフィサーはネットで自分に関する情報をあれこれ調べたと言う。しかし、その情報はおそらく、今自分が持っている資産の将来価値に関するものであり、現在価値ではないと伝えた。すると、比較的納得したような表情を浮かべ、私に書類を差し出し、私がそれにサインをすることによって、無事にその取り調べのようなものが終わった。フローニンゲン：2020/9/4（金）06:46

6196. 幸福な1日/連続する夢の世界

時刻は午後7時半を迎えた。今、空は曇っていて夕日を拝むことができない。だが、昼前から夕方にかけて良い天気であった。予定通りに午後3時に歯科医に足を運び、半年に一度の定期検診を

受けた。今回も虫歯はなかったが、今回はクリーニングが必要とのことだったので、来週にまた歯科医に行く。私としては半年に一度クリーニングしてもらった方が有り難く、前回はクリーニングが不要だったことがむしろ残念だったぐらいだ。

歯科医を訪れた後、行きつけのオーガニックコーヒー専門店に立ち寄り、2種類のコーヒー豆を購入した。その際に、いつもお世話になっている店員の女性に、スタンプカードを失くしたことを伝えた。そこではより具体的に、7月末のアテネ旅行の際に財布を盗まれたことを伝えた。この話をしたことによって、その店員の女性が共感と同情をしてくれたようであり、新しいスタンプカードだけではなく、スタンプを2倍押してくれた。私はその優しさに心を打たれ、感謝の言葉を述べて店を出た。

とても気分よく店を出た後に向かったのは、ABN AMRO銀行だった。iPad Proを通じてモバイルバンキングアプリを使いたいと思っていたのだが、初期設定がうまくできずに困っていた。パソコンで用いるオンラインバンキング用の端末とiPadのデバイスをケーブルで接続し、カードを読み込ませて初期設定をしようとしても、カードがうまく読み込めなかったのである。その問題を解決しに、銀行に向かい、すぐに担当の人が対応してくれた。その方は中年の女性であり、とても親切な対応をしてくれた。結論から言えば、初期設定の時にケーブルを繋ぐ必要はなく、カードを端末に読み込ませることができるそうであり、そうしなければ設定ができないとのことだった。いつもケーブルを使ってパソコンに接続していたので、まさか私はそのような使い方があるとは思ってもいなかった。

ケーブルをつながずして端末にカードが読み込まれた瞬間に、私は思わず「Oh, my God!」と叫んでしまった。するとその女性の店員は満面の笑みを浮かべて、「あなたは（テクノロジーに弱い）大学教授ですか？（笑）」と述べ、それに対しても笑ってしまった。その女性の中で、大学教授はテクノロジーに弱いと思っていることがおかしかった──おそらくその女性は、テクノロジーについていけていない大学教授を想像していたのだろう──。問題が無事に解決し、帰り際にオーガニックスーパーに立ち寄って、幸福な気持ちと共に自宅に到着した。今日はそのような午後を過ごしていた。

時間を巻き戻して昼前のことを思い出してみる。今すぐに引っ越すわけではないのにもかかわらず、少しばかりフローニンゲンの物件を改めて確認すると、先日にいいなと思っていた物件が早々と賃貸されたことを知った。その物件は本当に良い物件だと思っていたので、薄々そうなるとは想像

していたが、思っていたよりも早く借り手が見つかった印象だ。今後も自分の条件に合致するような似たような物件が必ず出てくるかと思うので、その時の出会いを楽しみにしたい。

単に緑が近くにあるだけではなく、テラスのある家も良さそうだし、今は中心部から西のところに住んでいるが、北のところに住むのも良さそうだと思った。静けさの中で生活し、内側の静けさの中により深く入っていこう。

昼食後に仮眠を取っている最中に、ビジョンを知覚した。そこでは朝の夢の続きを見ていたようだった。一度見た夢の世界がまだその続きを持っていて、それを引き継ぐ形で仮眠中にビジョンを知覚したことはとても興味深い。ひょっとすると、1つ1つの夢は独立しているように見えていながらも、どこかで連続しているのではないかと思った。まさに私たちの人生の1日1日が独立しているようでいて、1つの人生という観点から見ればそれは連続しているのと同じである。夢から覚めた後の世界、つまり覚醒後の世界もまた絶えず夢性を内包していることを考えてみれば、夢の世界は絶えず私たちと共にあるように思える。フローニンゲン：2020/9/4（金）19:52

6197. ティモシー･モートンの「対象志向性存在論」の探究

時刻は午後8時に近づきつつある。いよいよ明日は、ハーグから友人がフローニンゲンにやってくる日だ。待ち合わせは正午過ぎにフローニンゲン駅にしており、そこからForum Groningenを見学して、オーガニックレストランに向かおうかと思う。そこはレストランと言うよりもカフェのようなこじんまりとした大きさなのだが、落ち着いた雰囲気のように思える。本日の午後に歯科医に行った後に銀行に向かう途中に下見がてら再度店の様子を確認してきた。

先日アテネで送金に関して助けてもらった時以来にゆっくりと話すことが今から楽しみである。対面で会うのは1年振りぐらいかと思う。

今日は午前中に2冊の書籍を読み終え、午後に街の中心部での用事を済ませて自宅に戻ってきてから哲学者のティモシー･モートンの“Hyperobjects: Philosophy and Ecology after the End of the World”という書籍を読み始めた。これが予想以上に面白く、まだ半分ほどしか読んでいないのだが、すでに多くの新たな洞察をもたらしてくれた。

モートンが提唱するいくつかの概念については、今後追って書き留めていきたいと思うが、モートンの指摘として印象に残っているものの1つとして、「私たちの認知などというものは虫の白昼夢程度のものである」というものがある。私たちが認知できる世界などほんのわずかであって、極めて限定的であるということを再度肝に銘じる。

そもそも本書のタイトルにある“Hyperobjects”というのは、日本語に無理やり訳すとなると、「超対象（ハイパーオブジェクト）」とでもなるだろうか。モートンはその特徴をいくつか挙げているが、1つにはそれが「粘着性（viscosity）」を持つという性質がある。粘着性というとわかりにくいが、イメージは、私たちがプールに入った時、プールの水が絶えず私たちを取り巻いていて離さないようなイメージだ。その他の性質としては、意識の性質でお馴染みの「非局所性（nonlocality）」を持つということであり、暫定的に変動が伴い、尚且つ階層構造を持つと言うことなどが挙げられる。具体的な事物で言えば、モートンが本書で取り上げている「地球温暖化」という現象が挙げられるだろう。地球温暖化は物質次元でも精神次元でもまさにこの世界に遍く存在しており、私たちを絶えず捕らえている。また、特定の場所を持たないし、まるで生き物かのように変動していて、その影響や要因は複雑な階層構造を持っている。地球温暖化以外にも、金融市場、それから資本主義といった思想もまた超対象の1つの例かと思われる。また、「社会」や「世界」という言葉もまた超対象の一種だろう。

先日まではロイ･バスカーの「批判的実在論（critial realism）」を深く探究していたが、今度はモートンの「対象志向性存在論（Object-Oriented-Ontology）」を深く探究していこうと思う。バスカーも「不在の不在化（absenting absence）」という概念によって、不可視のものを可視化する思想的枠組みを提唱し、それを社会変革に適用していったが、モートンも同じく、対象志向性存在論を提唱し、不可視のものを可視化する形で、地球温暖化やその他の社会の複雑な問題の解決に向かっていこうとする点が共通しており、そこに大きく共感する。2人とも認識論を強調するのではなく、存在論を強調している点もまた興味深いところである。フローニンゲン：2020/9/4（金）20:13

6198. 生態経済学/時空間を生み出す事物

時刻は午前5時半を迎えた。辺りはまだ真っ暗であり、今は曇っているのか、昨日まで見えていた満月は見えない。

今日の最高気温は17度、最低気温は9度とのことなので、とても肌寒い1日になりそうだ。今日は正午過ぎに、ハーグから友人がやって来る。久しぶりに直接会って話ができることが今からとても楽しみである。駅で待ち合わせることになっているので、自宅を出発するのは正午前にし、そこからゆっくりと歩いて駅に向かいたい。出発までの時間はいつもと変わらずに創作活動と読書に従事する。

ここ最近は、睡眠前のヨガの時間を少し増やしている。ゆったりと入念にヨガを行ってから就寝すると、入眠がさらに良くなり、睡眠の質が高まっていることがわかった。やはり睡眠前にどのように過ごすのかによって、睡眠の質が随分と変わるようだ。ヨガのようにゆったりとした呼吸と動きをすることによって、身体がほぐれ、そこから睡眠に向かうと、身体がリラックスした状態で入眠できるのだと思う。この習慣はぜひ続けていこう。

昨日、生態経済学者のハーマン･デイリーの書籍が届けられた。それは“Ecological Economics, Second Edition: Principles and Applications”というタイトルの書籍であり、生態経済学に関するとても分厚いテキストだ。初読の開始はまだだが、早速中身をパラパラと眺めてみたところ、既存の経済学では新鮮な空気や水、そして生物多様性などが完全に無視されていると指摘されており、強く同意した。既存の経済学では、それらを包摂する形で理論モデルが構築されておらず、私もそこに問題意識を持っていた。

仮に水などが扱われる場合でも、それは単なる財と見做され、需要供給曲線を用いて議論がなされるぐらいだろうか。デイリーが提唱した生態経済学においては、こうした天然資源に対する意識が非常に高く、これから上記の書籍を読み進めるに際しては、具体的にそうした資源をどのように取り扱い、どのように既存の経済学を乗り越えようとしているのかを理解したいと思う。空気の新鮮さ、それに加えて、騒音の有無なども生態経済学で取り扱うことができるだろうか。

今日の読書は昨日に引き続き、ティモシー･モートンの“Hyperobjects: Philosophy and Ecology after the End of the World”を読み進めていく。モートンの指摘の中で、事物は時空間の中にあるのではなく、事物が時空間を放射する、という指摘には思わず唸ってしまった。

カントは物質を現象と物自体に分け、全ての現象はアプリオリに時空間に規定されていて、私たちは物自体を理解することができないと考えていた。一方モートンは、物質が時空間を放射し、私た

ちは共物質的に存在すると考えることによって、人間の感覚理解を遥かに超えた地球規模の種々の問題と向き合っていく道を提唱していった。

事物が時空間に埋め込まれているのではなく、事物が時空間を生み出しているという発想はとても興味深く、この考えをもとにすれば、私たち自身も時空間に埋め込まれているというよりも、各人が固有の時空間を生み出していると考えることもできるのではないかと思った。これまで私は、固有の時空間の中を生きていると思っていたが、実は自分でそうした固有の時空間を生み出しており、その時空間はいかようにも変容させることができるのかもしれない。私たちが生の充実さを感じるというのはひょっとすると、自ら自由に固有の時空間を生み出し、その中で生きている状態のことを指すのかもしれない。フローニンゲン:2020/9/5(土)05:53

6199. アートセラピー/フッサールの興味深い発見事項/今朝方の夢

時刻は午前6時を迎えた。辺りはまだ真っ暗であり、空がダークブルーに変わり始めるのはもう少ししてからかと思う。日が昇るのもすっかりと遅くなったものである。

昨日、作曲だけではなく、日々絵を描くことによって、ますます自己治癒が起こっているのを改めて感じていた。色を用いたカラーセラピー、そして音を用いたサウンドセラピーのようなものを知らず知らず自分に施していて、日々小さな治癒の体験を得ている。自分はアートセラピーの専門家ではないが、自らにそれを施す実践者として、これからもアートと付き合っていきたい。アートセラピーを自らに施すことによって、自分の内側で治癒と変容の双方がますます促進されていくだろう。

1つ前の日記で言及したティモシー・モートンの書籍を読んでいると、エドモンド・フッサールの大変興味深い発見事項に思わず唸った。それはどのような発見だったかというと、私たちはコインを何度投げても、コインの裏を裏として見ることができない、というものである。フッサールのその発見事項は、何か自分の認識をさらに押し広げてくれるようなものだった。自分の認識の枠組みが1つ外れたような気さえした。

そうなのだ。物事には絶えず両面あるはずなのだが、いつも私たちに見えるのは表だけなのだ。裏を見ようと思ってそれをひっくり返したら、その瞬間に裏だったものは表になるのだ。裏を裏としてあ

りのままに見ることの不可能性。それに気づいた時、日々の現象を見る眼はまた違ったものになるだろう。

それでは今朝方の夢について振り返り、早朝の創作活動と読書を進めていきたいと思う。夢の中で私は、見慣れない山岳地帯を歩いていた。視界はとても開けていて、見晴らしはとても良かった。近くには2人の友人がいて、色々と話をしながら歩いていた。しばらく歩いていると、牧草地帯に馬が所々いることに気づいた。どの馬もおとなしく休んでいた。

すると友人の1人が、この辺りには野生の巨大なヒグマが出没するとポツリと述べた。まさかと思っていたところ、遠くの方に見たことのないような大きさのヒグマが現れた。そのあまりの大きさに驚愕し、私たちはその場でじっとしていた。そのヒグマはとても獰猛で、人を食い殺すらしい。そうしたこともあり、私たちはヒグマがどこかに行くまでそこでじっとしていた。すると、そのヒグマはいったん私たちの方を振り返ったかのように見えたが、どこかに消えていった。

その後、2人の友人が消え、その代わりに小中高時代の別の2人の友人（HY & SI）と出会った。厳密には、私の体は大きなキャンピングカーの中にあって、そこで2人に出会ったのだ。私は2人に、先ほど見たヒグマについて話し始めた。すると友人の1人が、もうある友人（NK）の家にいくのはやめにすると述べた。なぜなら彼の家は山の中にあったからである。すると、またしても先ほどのヒグマが現れた。今度はキャンピングカーの方にゆっくりと寄ってきたので、私たちは静かにキャンピングカーの反対側の扉から逃げた。

そこで私の体は瞬間移動し、小中学校時代を過ごしたアパートの中にいた。そこには両親がいて、父曰く、自宅にはヒグマ保険がかかっているとのことだった。ヒグマがやって来ては困るので、ドアに鍵だけではなくチェーンもし、用心に用心を重ねた。すると、先日4階に引っ越してきたばかりのアフリカ系アメリカ人の家族が買い物か何かから帰ってきた。そこには奥さんはおらず、旦那さんと3人ぐらいの小さな子供たちがいた。

私は部屋の内側からドアの小さな覗き穴を通じてドアの外を覗いていた。すると、小さな男がドアの前にやってきて、うちのブザーを鳴らした。いたずらかと思ったが、彼の手にはうちに届けられたであろう、梱包された本を持っていたので、扉を開けて本を受け取った。彼にお礼を述べると、その横

にいた小さな女の子が「バナナかマンゴーはない？」と聞いてきた。どうやら果物が食べたいらしかったのだ。

最初私は「残念だけとないよ」と答えたが、バナナならあることを思い出したので、「ちょっと待ってて」と述べて、食卓に向かい、食べ頃の小さなバナナを取って来て、それを女の子にあげた。すると女の子は随分と喜んでいて、その様子を見ていた旦那さんが階段を降りて来て私にお礼を述べた。すると、バナナのお礼にと、ビデオテープを2本渡してきた。どうやらそれはヨーガ修行の奥義が解説されたものらしかったが、随分とホコリがかぶっていた。

私もお礼を述べ、ドアを閉めてから、食卓に向かった。ちょうど昼食どきだったので、昼食を食べ始めたところ、食卓の下にいた愛犬が、ご飯を食べようとする自分にじゃれてきた。私はご飯を食べる手を止めて、少しばかり愛犬と遊ぶことにした。今朝方はそのような夢を見ていた。フローニンゲン：2020/9/5（土）06:25

6200. ハーグに住む友人と過ごした土曜日

時刻は午前6時半を迎えた。この時間帯はもう当りが随分と明るくなっていて、今日は小鳥の鳴き声が聞こえてくる。どうやらその小鳥は独りのようだ。

フローニンゲンはもう完全に秋であり、秋の微風が吹いている。気温はとても低く、今の気温は11度である。今日の最高気温は17度、最低気温は8度とのことなので、昨日と同様に随分と冷える。ここからしばらくはこれくらいの気温が続き、今月末から来月にかけて一段と冷え始めると思われる。

昨日は、ハーグに住む友人がフローニンゲンにやって来た。正午過ぎから結局夜の9時半過ぎまで話をしていた。8時間半ほど一緒に過ごした時間があっという間に感じられるほど充実した時間だったように思う。午後9時半過ぎに別れたのだが、その時ですらもまだ話尽きぬものがあったように思う。

昨日は様々なテーマについて友人と話をした。レストランやカフェなど、場所を変えつつ多岐に渡る話をし、友人との対話を通じて得られたものは計り知れないものがあったように思う。ハッとさせられるような気づきもたくさんあったが、それだけではなく、自分の内側の感覚に響くものがたくさんあ

り、それらはすぐに言葉にならないようなものであった。おそらく真の対話というのは、そうしたものを授けてくれるのだろう。真の対話は、自己の奥深くに眠るものに対して働きかける力があり、奥底に眠るものをそのペースで内側から開いていく手助けをしてくれるものなのだ。そのようなことを改めて思った。

8時間半ほど対話をさせてもらうことによって、随分と多くのことが新たに内側から外側に向かって開かれる準備を始めたように思う。すでにその初動が起き始めた。そこには治癒と変容の兆しがあり、そのようなきっかけを与えてくれた友人には本当に感謝したい。そして、そうした対話が実現された場と時間そのものにも感謝をしたい。また、私たちをそこに運んでくれた全てのことに感謝の念を持つ。

昨日の友人との対話で考えさせられたことや感じたことについては、これからの日記を通じてゆっくりと深めていきたいと思う。今はまだ対話の余韻を味わっていたいような時間なのだ。もちろん、今すぐに書き留めておけるようなことは書き留めておきながら、しかるべき時が来て初めて書けるようなことはその時になって書き留めておけばいい。

今朝方起床した後に、いつもヨガを行って身体を整えるところを、ヨガに加えて、新たにダンスの要素を加えた。以前かかりつけの美容師かつ友人でもあるメルヴィンに触発されてダンスを始め、そこからしばらくダンスを実践に加えていた。昨日の友人との対話でも、ダンスに関するとても興味深い話を聞いて、今朝は早速自分の内側にある感覚を身体全体を通じてダンスによって形にしてみた。やはりこれはとても自分にとって大事な実践のように思えた。

そこには喜びや楽しさ、音楽や絵の創作とはまた違った治癒と変容の作用がある。何よりも身体全体を通じて何か自己を超えたものと一体化するような感覚もある。音楽をかけながらのダンスや音楽なしのダンスなど、ここから色々と実践を通じてダンスについて模索していこう。昨日は本当に充実した1日であり、これからの人生の節々で昨日のことを思い出すに違いない。フローニンゲン：2020/9/6（日）07:03